

4つの空間概念を組み込んだ中学校社会科観光学習の授業開発

－単元「日本の諸地域（近畿地方）」を事例として－

Development of a Lesson to Learn about Tourism in Junior High School Social Studies That Includes Four Spatial Concepts : A Case Study of the Unit “Districts in Japan (Kinki region)”

柳澤彰紀
(京都府教育委員会)

キーワード：地理教育，空間概念，授業開発，観光，近畿地方

Key Words : Geographical Education, Spatial Concept, Lesson Development, Tourism, Kinki region

I. 問題の所在

観光は、「日常空間を離れた非日常性の追求」を特質とする⁽¹⁾。非日常性の追求は、日常の生活空間とは異なる空間に存する観光の目的となる対象（観光資源）との関わりの中で生起する。日常の生活空間とは異なる空間に人が移動することで、観光空間が形成される。

観光の需要や形態は、経済情勢や国際情勢、感染症の拡大などの影響を受け、時代とともに変容する。観光の取引高は、2010年代後半において、石油輸出、食料品、自動車に匹敵、あるいは凌駕している状況⁽²⁾が見られる。また、SDGsの指標には観光に係る項目が複数見出せる。佐藤(2017)は、観光学は、「観光需要及び観光形態に影響を与える要因」、「観光地形成に関する要因」、「観光によってもたらされる要因」を経済、社会、政治、文化、地理といった社会諸科学を分析視点として解明してきたことから、「その研究成果を社会科教育の論理に基づき、教育内容として組み込むことで社会科教育の目標達成に寄与する有効な材料として指定することができる」としている⁽³⁾。

ところで、20世紀後半以降の都市化・近代化・グローバル化といった時代状況の大きな変化は、既存の社会科学諸分野を、その内容に空間論的視点を含んだものに変貌させている⁽⁴⁾。観光学も然りであり、現代社会のしくみや特徴が観光空間に反映されていると考える。また、社会の情報化やグローバル化による国内の地域間、国家間の結び付きの緊密化や人や物、情報などの動きの活発化を地理情報として捉える必要性が増大している

⁽⁵⁾。観光には、そうした地理情報が多く含まれており、それらは空間理解や空間形成の情報源ともなる。観光を通して空間次元に現代社会のしくみや特徴を見出すことや、観光から得られる地理的情報を空間理解や空間形成に結び付けて考察することは、科学的な空間認識の形成につながる。

社会科教育において空間認識を語る場合、その基底となる空間概念についての考察が必要である。空間概念について、三輪(2007)は、同一用語の異なる定義は、他の見方では看過しやすい特性を互いに補足しあうこともあり得るとし、重要なのは空間の定義を一つに確定させることではなく、空間という概念の多様性を認めることであると指摘する⁽⁶⁾。重要なことは、社会科教育として受容できる空間概念を同定し、観光を考察することである。

なお、改訂された学習指導要領において、社会科では従前以上に観光を学習の対象とする方向性が示された。たとえば、小学校4年では、県内の特色ある地域において、人々が協力して特色あるまちづくりや観光などの産業の発展に努めていることを理解することが学習指導要領の本文に明記された。また、高校必修履修科目「地理総合」では、観光の現状や動向に関わり、国際的な人々の移動を通じた地域や国家間のつながりを取り上げ、地図や地理情報システムの活用の仕方を学ぶ項目が設けられた。

一方、中学校の学習指導要領に「観光」は明記されておらず、学習指導要領解説に、交通網の整備により観光客の訪問先が広がっているといった扱いが例示されている程度である⁽⁷⁾。社会の担

い手となる子どもは、将来、観光客にもなれば観光地住民にもなる。中学校段階において、観光空間に係る空間認識を形成する機会を保障する必要がある。

そこで、本稿では、まず、社会科教育に受容された空間概念を同定し、観光空間の考察での用いられ方を整理する。次に、その考察と連動させて、観光学と地理学の研究成果を授業構成理論に活かす。最後に、近畿地方を事例とし、中学校地理的分野「日本の諸地域」の授業モデルを開発する。

II. 教育内容の理論的背景

1. ヴァルデンガ (Wardenga, U.) による4つの空間概念

空間概念に係る地理学の研究成果が社会科教育(地理教育)に受容され、かつ、空間に対するさまざまな見方・考え方を保障する空間概念を、阪上(2015)や山本(2017)は、ドイツ地理学者ヴァルデンガによる4つの空間概念に見出す⁽⁸⁾⁽⁹⁾。このうち、阪上は、4つの空間概念の由来と学習の視点を表1のとおり整理している。これらの空間概念は、ドイツ地理学がその発展過程において地域や社会を研究するために用いてきた研究方法・手法である。

「コンテナとしての空間」は、コンテナ(容器)という言葉が示すとおり、物理的・物質的な事象を包み込む空間である。伝統的な地理学に依拠する空間概念であり、学習の対象に静態地誌的な学

習のアプローチがとられる。岩田(2019)は、静態地誌的学習は、知識過剰、暗記主義学習との批判を受け続けているが、主役の座を譲らず、今日まできているとする⁽¹⁰⁾。「空間構造研究の空間」は、対象物の位置や位置関係、距離や分布などの対象間の関係性からなる空間である。「コンテナとしての空間」が、自然要素や人文要素の存在という叙事的な地誌に留まるとい批判に対し、自然と人文の関係論を科学的に担保する役割を担うものとされる⁽¹¹⁾。「認知地理学の空間」は、個人や集団が主観を通じて知覚し、認知する空間である。空間概念に「認識」類型を見出す論には、人間に世界を動かすという中心的・能動的な役割を与える人文主義が基底にある⁽¹²⁾。「情報伝達と行動に関する要素としての空間」では、空間を社会的に作られたもの、構成物とする。空間はどのようなプロセスで形成・演出されているか、将来、どのような空間形成が構想されるかなどの視点での学習を保障する。阪上(2019)は、この空間概念を「作られた空間」とも表記しており、本稿ではこの用語を用いる⁽¹³⁾。

4つの空間概念のうち、前者2つは、空間に関する知識や法則の学習(空間理解)の視点に対応し、地表面に立ち現れる現実的な事象を対象とする。後者2つは、空間を構成する要素や学習者と空間との関わり方の学習(空間形成)の視点に対応し、認識論や構成主義的な観点から空間を対象化する⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾。空間形成を視座とする空間概念は、

表1 4つの空間概念の由来と学習の視点

空間概念の名称	空間概念の由来	学習対象に対する視点
コンテナとしての空間	伝統的で空間科学的な地理学	学習する地域に含まれる地形や気候、工業や農業などの諸分野から網羅(静態地誌)的に学習する視点
空間構造研究の空間	1970年代からの空間的アプローチのもとで発展した空間構造研究	学習する地域における具体的な対象物の位置や距離、対象物間の関係性(例えば、郊外地域とCBDの距離や位置関係)を学習する視点
認知地理学の空間	1970年代末から始まった行動科学アプローチ	学習する地域を誰が(例えば、個人、特定の集団、組織)、どのように知覚するかによって、地域の認知の仕方や評価が異なる(例えば、住民と観光客からみた地域の認知・評価の差異)ことを学習する視点
情報伝達と行動に関する要素としての空間	社会地理学	学習する地域を人間や社会によって作りだされたものと捉え、それが形成されるプロセスに着目し、地域がどのように形成されるかを学習する視点

(阪上(2015)作成をドイツ語訳部分を除いて引用)

それを形成する主体の存在と主体と空間との関係性を前提にしている。また、空間は変えられない1つの事実ではなく、空間の形成には多様な方法・アプローチがあることを1つの事実として学ぶことができる。よって学習活動としては、問題解決的な学習を取り入れやすい。

4つの空間概念が地理教育に受容された要因として、ドイツでは、地理教育目標に記載のコンピテンシーの説明に、空間概念に基づく空間的な見方・考え方が用いられ、4つの空間概念に基づく学習がコンピテンシー育成を可能にするという認識が広まった点あげられる。また、4つの概念をともに組み込む授業開発が進んだことも地理教育に受容された要因としてあげられる⁽¹⁶⁾。

事例の1つに、ラインラント＝プファルツ州のニュルブルクリンクを含む周辺地域の空間分析がある⁽¹⁷⁾。小単元1で4つの空間概念が示され、「ニュルブルクリンク地域を4つの地理的空間概念に沿って、問題志向的な空間分析を実施しなさい」という単元全体の課題が提示される。小単元2～5では、各空間概念に即して空間分析のための多様な資料が提示される。その中で、ロックフェスティバルやF1開催地としてのニュルブルクリンク地域に焦点が当てられ、小単元5の最後には、メディアを通して「作られた空間」を他の3つの空間分析から得られた知識を用いて批判的に考察する。この事例は、ギムナジウム課程のものであり、空間分析の手法を学ぶ過程が重視される。4つの空間概念は、直接的な教育内容として個別的に授業に組み込まれ、ニュルブルクリンク地域についての空間認識の形成が図られる。

一方、日本の小学校5年「観光産業－人気観光地のヒミツと影響」では、4つの空間概念に順序性がない授業モデルが開発されている⁽¹⁸⁾。単元の第1次では、築地市場や日光東照宮が観光地として人気がある理由を追究する過程で、「コンテンツとしての空間」と「空間構造研究の空間」が、『神の湖』と呼ばれ、魚が棲んでいなかった中禅寺湖で、鱒釣りが行われるようになった理由を追究する過程で、「作られた空間」が取り上げられる。また、第2次では、日光や中禅寺湖が観光地化することに、地域住民・観光者・観光産業従事者・自然保護者はそれぞれどう思っているのかが追究

されるが、これは「認知地理学の空間」の視点による。第3次では、築地市場の移転に伴う影響と豊洲地区の持続可能な観光地化の方策を考える。これは、観光空間は作られるものであるという認識に立ったものである。全体を通して、この事例は、築地市場や日光周辺をめぐる観光に関わって、複数の空間概念を援用してその地域的特色を総合的に明らかにする学習である。

2. 非日常性の追求

観光学において、同じ対象を非日常性のあるものと認識するかは、その対象へのまなざしによるとされる。ナイアガラの滝は地元の人にとっては日常的にあるものだが、地元以外の人にとっては非日常的なものであるから観光資源になる⁽¹⁹⁾。まなざしによって捉えられる空間は、個人や集団が主観を通じて知覚し、認知する空間であることから、「認知地理学の空間」と言える。

アーリ(Urry, J.)とラースン(Larsen, J.) (2014)によれば、まなざしは習得された能力であり、言語と同じで社会・文化的な枠組みがあり、社会構造化されている。その枠組みによって対象の見方が変わることから、社会や社会集団、時代によってまなざしは異なることになるという⁽²⁰⁾。そこで、「認知された空間」では、同時代を生きる当事者・関係者による異なるまなざしに限らず、異なる時代におけるまなざしの違いについても、授業構成の視点の範疇に入れる。また、観光客のまなざしは、ガイドブックや映画・テレビなどの非・観光的な技術によってたえず作り上げられている。まなざしはメディアが生産する記号によって作られ、強化される。遠藤(2019)は、観光において重要な情報・イメージをつくりだす上で大きな役割を果たしつつあるのが、ブログ、SNS、動画共有サイトなどのデジタルなウェブ上のプラットフォームであるという⁽²¹⁾。「認知された空間」では、まなざしに影響をあたえるもの(メディア等)の空間認知も存在することから、こうしたまなざしを形成するものも、授業構成の視点の範疇に入れる。

なお、観光資源は、自然資源は10種、人文資源は14種に区分され、その情報が公開されている⁽²²⁾。24種のうち、1999年版改定の2014年版では新たに、テーマ公園・テーマ施設、温泉、食、

芸能・興行・イベントの4種が追加された。観光空間に移動する、あるいは移動を促す主体が、これらを非日常性あるものとしてまなごしに向けた結果の表れである。

3. 観光空間の形成

神田(2014)は、ルフェーヴル(Lefebvre, H.)の空間は所与のものではなく、社会的に生産されるものであると捉える空間の生産論から、資本主義社会において形成される空間には、もろもろの現存の差異や個別性を縮減する均質化と、あらゆるものを断片化し差異化を進めるという矛盾した特徴がある点を見出し、観光空間の形成を説明している⁽²³⁾。空間の均質化については、産業革命期の運輸・通信技術の発達による空間的な障壁の減衰が観光空間の形成を促し、空間の差異化については、空間的障壁が小さくなることで、様々なスケールの場所が競争的な環境に置かれ、観光への資本投下が重要なテーマとなったことをあげている。

ハーヴェイ(Harvey, D.) (1999)は、1970年代以降の「時間 - 空間の圧縮の強烈な段階」が場所と空間の性質とイメージを根本的に変えたという⁽²⁴⁾。衛星通信を介し、様々な異なった空間から情報が一斉に押し寄せの中で、世界の諸空間はスクリーン上に写し出される一連のイメージへと崩落するなど、グローバル化の進展は空間を均質化するという指摘である。観光においても、テレビの旅行番組は、身体的な移動が伴わないが、視聴者をあたかもその場にいるような感覚へといごなう。一方、場所と空間のイメージは、物質的なものと同じように様々な生産されるがゆえに、使い捨てにもされる。資本は、空間内における場所のヴァリエーションにより敏感になり、場所の差異をつくりだそうとする誘因を強めるが、イメージの生産であるがゆえ、その消費はうつろいやすい。現代社会は、空間の均質化によって観光空間が拡張される一方、他の場所との激しい競争にさらされ「場所の意味の絶え間ない更新こそ観光地が非日常を保つ秘訣である(つねに更新しているディズニーランドを見よ)」と須藤(2018)が述べている⁽²⁵⁾。状況が見られる。均質化と差異化という矛盾する空間の特徴(以下「空間の均質化と差異化」という)は、観光空間が社会的に生

産されることの表れであり、これを授業構成の視点の範疇に入れる。

4. マルチ・スケールのアプローチ

現代社会は、ローカルからグローバルまで様々な空間スケールの相互作用のもとに成立している。地理学において、ローカルに発生する問題であっても、世界という文脈の中に位置付ける研究視角が、階層性や重層性を有する空間の理解に非常に重要であるとされる。世界の政治経済的な構造変化の中で、異なるスケールを視野に収めるマルチ・スケールでの考察の重要性が増している⁽²⁶⁾。このアプローチによる中学校社会科授業モデルの開発の先行研究として、吉水(2011)のものがある⁽²⁷⁾。吉水は、空間と時間あるいはその組織化が、その社会によって作り出される社会的生産物であるという前提をもつ地理的スケールの論理と、多様なスケールで同時展開する社会事象の重層性や階層性を読み解くマルチ・スケールのアプローチの論理に依拠した社会科授業モデルの有効性を示した。マルチ・スケールによる地理学的認識は、観光のまなごし論や観光空間の形成論に、より地理的現実を付与する。例えば、海沿いに鳥居が並ぶ元乃隅稻荷神社(山口県)は、SNSへの投稿が世界に広まり、世界各地から訪れる人が急増した。また、グローバルな政治、経済、社会の情勢の影響を受けることにより、観光空間への移動の多寡が生じ、観光産業の盛衰につながることは実感として捕捉しやすい。

Ⅲ. 教科書分析

1. 分析目的と内容

Ⅱにおいて、ヴァルデンガによる4つの空間概念は、観光学習において社会科教育に受容されていることを把握し、空間概念を直接的な教育内容とし、個別的に用いる中で空間分析の手法を学ぶ事例と、空間概念を援用して総合的に地域的特色の理解を図る事例とを抽出した。教科書分析では、まず、いずれのパターンで内容が構成されているかを見る。次いで、4つの空間概念のどの概念が用いられ、空間認識の形成につなげているかを分析する。「認知地理学としての空間」については、同時代のまなごしに限らず、異なる時代のまなごしやまなごしを形成するものについても分析視点

として取り上げる。「作られた空間」については、現代資本主義の特徴である空間の均質化と差異化を「作られた空間」の1つの類型として分析視点として取り上げる。さらに、マルチ・スケールのアプローチに係る教科書記述上の特徴を分析する。これらの分析を重ね合わせることにより、教科書上での観光学習が空間に対する見方・考え方を豊かなものに行っているかどうかを把握する。

対象とする教科書は、平成20年版中学校学習指導要領に基づく教育出版、帝国書院、東京書籍、日本文教出版の地理的分野全4社の教科書とする⁽²⁸⁾。学習課題(テーマ)に、用語として「観光」が用いられている8事例(北海道5、東北1、中国・四国1、九州1)の記述内容を分析する。

2. 分析結果とその考察

8事例すべてが、空間概念を直接的な教育内容とするのではなく、空間概念を援用する形で観光学習を行うものであった。日本の諸地域学習が、考察の中核となる事象の成立条件を他の事象と関連付けて地域的特色を明らかにする動態地誌学習を構成原理としている点の表れであろう。

「コンテナとしての空間」と「空間構造研究の空間」は、8事例すべてに見られた。「認知地理学としての空間」は、1事例であった。沖縄県において、国や県は観光開発に力を注ぐ一方、海水温の上昇などによるさんごの白化現象やオニヒトデによる被害、捨てられた釣り糸や漁網などによる影響から、観光業者や漁業関係者が海利用のルールをつくったり、市町村や企業、民間の人たちが海岸清掃等やオニヒトデの駆除などを行うという記述であった(教育出版)。これは、同時代の異なるまなざしである。「作られた空間」は、4事例であった。そのうち、空間の均質化と差異化は、1事例であった。北海道において、農村風景の美しさが話題となる中、美瑛町のよびかけでつくられた「日本で最も美しい村」連合の取組は、都市部とは異なる農村部の価値を主張する動きとして注目されているという記述であった(日本文教出版)。援用される空間概念が限られていること背景には、観光学習に係る知見が十分でなく、教科書が考察の中核となる事象として観光を取り上げるには至っていない状況の表れとも考えられる。また、マルチ・スケールのアプローチは、4

事例であったが、そのうち3事例が、冬の北海道には異なる自然条件の外国からスキー客が多く来るといふものであり、特定の内容に偏っていた。概して、教科書を用いた学習では、地表面に立ち現れる現実的な事象を対象に、少ない情報量で空間理解が目指され、観光空間の形成に係る認識が十分に図られるとは言い難い。観光のまなざし論に係り、平成10年版学習指導要領の下でも、まなざしを用いての観光地形成を説明する知識の習得が目指されていないという指摘があった⁽²⁹⁾が、改善が図られたとは言えない。

IV. 授業モデルの開発

1. 授業構成の視点

授業モデルとして、4つの空間概念すべてを援用して6時間の指導計画を作成し、観光空間に対する見方や考え方を豊かにする。「認知地理学の空間」については、同時代の異なるまなざしのみならず、異なる時代のまなざしやメディアなどまなざしを形成するものが知覚し、認知する空間を、「作られた空間」については、空間の均質化と差異化が見られる場合とそうでない場合を区分して捉える(表2)。また、空間の重層性や階層性など空間の関係性をとらえる視点であるマルチ・スケールのアプローチを組み込む。

表2 授業構成の視点

単元指導計画に組み込む具体的な視点	
空間概念	コンテナとしての空間
	空間構造研究の空間
	認知地理学の空間 (同時代の異なるまなざし)
	同上 (異なる時代のまなざし)
	同上 (まなざしを形成するもの)
	作られた空間
	同上 (空間の均質化と差異化)
マルチ・スケールのアプローチ	

(筆者作成)

2. 単元の概要

(1) 単元目標

近畿地方で観光がさかんであること理由を、歴史的価値を伴う観光資源が多いこと、京阪神都市圏を中心にした交通網の整備、観光客がもつ、

あるいはメディアが創り出す観光資源へのイメージ、観光に関わる観光客・住民・自治体・観光産業従事者の営みといった観点での考察を通じて理解する。また、持続可能な観光が課題になっている地域について、そのあるべき姿を考え、観光空間を構想する。

(2) 各時の概要と授業構想の視点

計6時の指導計画は、岩田(1994)の社会科授業理論⁽³⁰⁾を基に、第1～5時の授業を「なぜ、近畿地方は観光がさかんな地域になっているのだろうか」という課題の追究段階とし、身に付ける知識を説明的知識とする。また、第6時の授業を未来予測・価値判断の段階とし、地域の在り方について考える。

第1時では、諸資料から近畿地方への観光客数を事実的知識として読み取り、近畿地方の主な観光資源とその特徴を把握する(「コンテナとしての空間」)。また、観光資源の位置や分布を把握する(「空間構造研究の空間」)。併せて、非日常性の追求を目的に観光地が形成されるのではないかという点での考察(「作られた空間」)や、観光資源台帳に新たな資源が加わった理由の考察(「認知地理学の空間(異なる時代のまなざし)」)も行う。なお、リーマンショックや東日本大震災の影響による観光客数の変化は、「マルチ・スケールのアプローチ」からの学習とする。

第2時では、京阪神大都市圏と全国や世界各地との交通網による結び付きとともに、大都市圏内の各都市間の人の流動実態を把握する(「空間構造研究の空間」)。その際、海外及び国内各地からの移動、近畿地方内での移動といった異なる空間の関係を追究する(「マルチ・スケールのアプローチ」)。

第3時では、京都市、大阪市、神戸市に焦点をあて、3都市のイメージや景観政策と実際に経験される観光との関係性を追究する(「認知地理学の空間(まなざしを形成するもの)」)。3都市にもつイメージを各市民、他市民、学習者間で比較する学習(「認知地理学の空間(同時代の異なるまなざし)」)で、3都市の観光の特徴をより浮かび上がらせる。また、ウェブサイトで外国人人気1位となった伏見稲荷大社を「インスタ映え」する鳥居やアニメの舞台などの影響と関連付けて捉

える学習(「認知地理学の空間(まなざしを形成するもの)」)においては、「マルチ・スケールのアプローチ」をとる。

第4時では、京都市、大阪市、神戸市の新旧観光の特色を比較する(「認知地理学の空間(異なる時代のまなざし)」)。次いで、神戸市を事例に、江戸末期からの政治・社会情勢を背景に、現代の観光空間の形成に至るまでの過程、特に、1970年代からの他の都市には見られない観光資源の発見と創出を学習する(「コンテナとしての空間」,「空間構造研究の空間」,「作られた空間(空間の均質化と差異化)」)。

第5時では、「伊勢神宮門前町」,「近江八幡の水郷」,「大和・飛鳥ステイ」,「紀伊山地の霊場と熊野古道」の観光の特色や観光空間の形成・維持の過程を、観光産業従事者、住民、行政といった観光の当事者・関係者の視点で追究する(「コンテナとしての空間」,「空間構造研究の空間」,「認知地理学の空間(同時代の異なるまなざし)」,「作られた空間」)。4つの地域において、具体的な人物の営みに関連付ける追究を行うものとする。

第6時は、現在及び将来における観光空間の構想を学習の対象とし、持続可能な観光の在り方について考える。京都市の事例では、「マルチ・スケールのアプローチ」とし、インバウンド増加に伴う交通の混雑や観光マナーの課題、民泊の増加等、オーバーツーリズムがもたらした影響を考察する(「認知地理学の空間(同時代の異なるまなざし)」)。また、歴史・伝統がある京都市の観光空間の在り方を考察する(「作られた空間」)。天橋立の事例では、周辺の砂防ダムが海への砂の流入減少をもたらし、結果として細くなった松並木の景観を守るために突堤が築かれたこととその影響を考察(「作られた空間」)し、自然遺産ではなく文化遺産登録が目指される理由の追究(「認知地理学の空間(異なる時代のまなざし)」)、今後、他の観光空間にはない観光資源の発見・創出の可能性について考える(「作られた空間(空間の均質化と差異化)」)。

3 単元指導計画

第1時 近畿地方への観光客の移動状況の読み取りと観光資源の存在の理解

段階	教師の指示・発問	生徒が得る情報・生徒の思考	授業構成の視点
学習の課題の把握	<p>「地域別修学旅行先一覧表（中学校）」から、近畿地方の特色を読み取る。</p> <p>観光庁の統計から、全国や近畿地方の主な府県の観光入込客数の変化を読み取る。</p> <p>外国人向け旅行案内書「ミシュラン・ジャパン」では、どの地域のことに多くのページが割かれているのだろうか。</p>	<p>・関東、中部、中国、四国、九州、沖縄からの修学旅行先で最も多いのが近畿地方である。</p> <p>・近年、大幅な増加傾向にある。特に、経済成長が著しい地域からの訪日外国人の増加率が目立つ。</p> <p>・2009年や2011年はなぜ落ち込んでいるのだろうか。（リーマンショックや東日本大震災の影響）</p> <p>・2020年の結果はどうなるのだろうか。</p> <p>・順に東京（65ページ）、京都（47ページ）、大阪（17ページ）、奈良・法隆寺・吉野（15ページ）となっている。</p>	<p>●コンテナとしての空間</p> <p>○マルチ・スケールのアプローチ</p> <p>●コンテナとしての空間</p> <p>●コンテナとしての空間</p>
単元を貫く中心的な問い「近畿地方は、なぜ観光がさかんな地域になっているのだろうか」			
課題の追究①（空間理解）	<p>なぜ、観光地に向かっての人の移動が起きるのだろうか。</p> <p>2014年版の全国の観光資源台帳に、人文資源として「テーマ公園・テーマ施設」、「食」、「温泉」などが加わったのはなぜだろう。</p> <p>近畿地方のどこに、どのような観光資源があるのだろうか。</p> <p>公益財団法人日本交通公社で選定された、近畿地方の特に価値ある観光資源は何だろうか。</p>	<p>・普段の生活の中では見られないことや体験できないことを求めて、人々は観光をするのではないかと、観光地はそれを目的に生み出されるのではないかと。</p> <p>・観光は、社会の移り変わりの中で多様化してきているのではないだろうか。</p> <p>（観光資源を書き出し、グルーピングする。）</p> <p>・とても多くの観光資源があることがわかる。</p> <p>・「神社・寺院・教会」「城跡・城郭・宮殿」「年中行事（祭り・伝統行事）」といった歴史的価値を有する観光資源の数が他地域よりも目立つ。</p>	<p>●作られた空間</p> <p>●認知地理学の空間（異なる時代のまなざし）</p> <p>●コンテナとしての空間</p> <p>●空間構造研究の空間</p>
<p>【獲得される説明的知識】 近畿地方にはさまざまな観光資源があり、特に歴史的価値を伴うものが多い、それが国内外から多くの観光客を誘引する要因になっている。</p>			

第2時 近畿地方への観光客の移動及び京阪神都市圏内での移動の特色の考察

段階	教師の指示・発問	生徒が得る情報・生徒の思考	授業構成の視点
課題の追究②（空間理解）	<p>観光客はどのような手段により、近畿地方に集まるのだろうか。</p> <p><国内での移動はどうだろう></p> <p><国外からの移動はどうだろう></p> <p>近畿地方内での移動には、どのような特色が見られるのだろうか。</p> <p><京都、大阪、神戸から主な観光地への移動時間を調べてみよう></p> <p><訪日外国人の京阪神大都市圏での移動には、どのような特色があるのだろうか></p>	<p>・近畿圏内の観光客は鉄道や自家用車での移動、圏外の観光客は新幹線、高速バス、飛行機で、まずは京阪神大都市圏に来るのではないかと。</p> <p>・新幹線開通前の初の修学旅行列車では、行は昼出発、帰りは夜行の車中泊であり、移動に時間がかかった。</p> <p>・近畿地方への訪日外国人は、三重県を除いて関西国際空港に到着する人が最も多い。</p> <p>・成田国際空港や東京国際空港に入国後、近畿地方を訪問する外国人もいる。東京から順に観光しながら（ゴールデンルート）、来ているのではないかと。</p> <p>・近畿地方には、クルーズ船寄港地が3港もある。</p> <p>・他地域に比べてとき、府県庁所在地2地点間の距離は短く、各地点間の移動時間も短くてすむのではないかと。（インターネットを用いて、新幹線「京都」「新大阪」「新神戸」を起点にしたときの主な観光地への距離と移動時間を調べる。）</p> <p>・ICカード型乗車券での鉄道による周遊状況から、京阪神大都市圏では、大阪・京都間、大阪・奈良間、大阪・神戸間に大きな府県間の流動がある。</p> <p>・府県別滞在時間の中央値は、大阪府が61.4時間、京都府30.2時間であり、多くの外国人が大阪、京都で滞在型の観光をしているのではないかと。</p> <p>・兵庫県や奈良県の滞在時間は短く、周遊型の1つとしてそれらの県を観光しているのではないかと。</p>	<p>○マルチ・スケールのアプローチ</p> <p>●空間構造研究の空間</p> <p>○マルチ・スケールのアプローチ</p> <p>●空間構造研究の空間</p> <p>●空間構造研究の空間</p>
<p>【獲得される説明的知識】 近畿地方では、空港、高速道路、新幹線などが整備され、観光空間形成の要因になっている。近畿地方では、外国人を受入れる空港から大阪、京都、奈良、神戸へのアクセスが容易であり、かつ大都市圏内の交通網が整備されていることが観光にとって有利な条件となっている。</p>			

第3時 京都、大阪、神戸の3都市にもつイメージと観光の特色との関連付けとその比較

段階	教師の指示・発問	生徒が得る情報・生徒の思考	授業構成の視点
課題の追究③ (空間形成)	観光客は、観光の情報をどのようにして入手しているのだろうか。 <伏見稲荷大社で外国人観光客が急増したのはなぜだろう> <私たち自身が観光客の場合はどうだろう> 京都市、大阪市、神戸市それぞれに、どのようなイメージがもたれているのだろうか。 <各市民は、自分たちが住む市にどのようなイメージをもっているのだろうか> <各市民は、他の市にどのようなイメージをもっているのだろうか> <私たち中学生は、3都市にどのようなイメージをもっているのだろうか> 観光には、観光地それぞれのイメージが組み込まれているのではないだろうか。 <3都市のイメージと観光にはどのような結びつきがあるのだろうか> <3都市の特色ある景観政策と観光にはどのような結びつきがあるのだろうか>	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブサイト上の「外国人による人気の観光スポット」調査で1位となった伏見稲荷大社の情報は、世界各地で閲覧されている。また、「インスタ映え」する鳥居、アニメの舞台などの影響もあり、伏見稲荷大社に観光へ向けて世界から人が多く集まるようになったのではない。 ・私たちの観光地や宿泊先の選択、観光の行動、土産物の購入も、SNSやブログ、各種メディアの情報の影響を受けているのかもしれない。 (3つの資料をレーダーチャートに表し、共通点と相違点を把握する) ・京都市は「歴史・伝統があり落ち着いたイメージ」、大阪は「賑やかで活気のある大都会」のイメージ、神戸は「エキゾチック」なイメージが共通して高い値になっているのはどうしてだろう。 ・3都市のイメージは、写真や動画など視覚に訴えるものを通じて形成されたものではないか。 ・3都市のイメージに結びつく観光は何かを考える。 ●京都・・・社寺、御所、庭園、山並み、精進料理や和菓子、伝統芸能、祇園祭等 ●大阪・・・道頓堀、USJ、お笑い劇場、たこ焼き、スカイビル、水上バス等 ●神戸・・・異人館、南京町、旧居留地、洋菓子や神戸牛、夜景等 ・3都市の景観政策は、どのような観光のまなざしを形成するかを考える。 ●京都市では、優れた眺望景観を阻害しないような景観に関する条例を制定 ●大阪市では、道頓堀を明るく華やかなものとするため屋外広告物の規制を緩和 ●神戸市では、市民の公募をもとに「神戸都心夜景10選」を選定 	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ・スケールのアプローチ ●認知地理学の空間(まなざしを形成するもの) ●認知地理学の空間(まなざしを形成するもの) ●認知地理学の空間(同時代の異なるまなざし) ●コンテナとしての空間 ●認知地理学の空間(まなざしを形成するもの) ●認知地理学の空間(まなざしを形成するもの)
	【説明的知識】 私たちは、視覚に訴えるものや景観政策によって観光地のイメージを形成し強化するが、異なるイメージを創り出している京都・大阪・神戸での観光が、距離的に近いということで1度の訪目で可能であるという利点が、一大観光空間の形成の要因になっている。		

第4時 観光空間が形成される歴史のプロセスを神戸市を事例として考察

段階	教師の指示・発問	生徒が得る情報・生徒の思考	授業構成の視点
課題の追究④ (空間形成)	明治時代と平成時代の外国人向け旅行案内書を比較してみよう。 大正時代に紹介されている京都市、大阪市、神戸市の観光を、現代の3都市の観光と比較してみよう。 「北野異人館」や「南京町」の観光地化はどのように進んできたのだろうか。 <江戸末期の開港時はどんな状況であったのだろうか> <明治から昭和初期にかけてどのような状況にあったのだろうか> 居留地、異人館街、南京町に共通していることはどんなことだろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・東京、京都、日光、富士山、奈良は130年以上にわたって外国人旅行者からの人気を保っている。 ・明治時代には、富士山に加えて北岳などの登山対象が、外国人に興味をもたれた。 ・姫路・知床・屋久島・宮島が平成時代に高い評価を受けた理由は、世界遺産の登録が関係しているのだろう。 ●京都市は、大正時代も今も「市の全体それ自体が名所旧蹟」と言われてよいだろう。 ●大阪は、「水の都」と言われていたが、現代では「水の都」を取り戻そうとする動きがある。 ●神戸市は、観光地としての見方はあまりなく、現代と大きな違いを感じる。 ・開港した神戸港は、かつての兵庫港から北東部にあり、旧生田川と鯉川筋の間に外国人居留地が定められた。 ・日本と清の条約はなく、清の人は外国人居留地に住むことができず、その西側に雑貨商、飲食店などを始めた。 ・居留地の用地不足や居留地内の整備の遅れにより、山の手に日本人との雑居が認められ、異人館が造られた。 ・歴史の中で形成されてきた空間が、異国情緒ある神戸のイメージとして共通性をもち、1970年代以降観光資源として発見・創出された結果、観光地化したと考えられるのではない。 	<ul style="list-style-type: none"> ●認知地理学の空間(異なる時代のまなざし) ●認知地理学の空間(異なる時代のまなざし) ●コンテナとしての空間 ●空間構造研究の空間 ●空間構造研究の空間 ●作られた空間(空間の均質化と差異化)

第5時 観光空間に関する観光客・住民・自治体・観光産業従事者の営みの考察

段階	教師の指示・発問	生徒が得る情報・生徒の思考	授業構成の視点
課題の追究⑤ (空間理解・空間形成)	<p>観光には、どのような人が関わっているのだろうか。</p> <p><4つの事例について、観光産業従事者、地域住民、行政など観光の当事者・関係者の観光への関わり方を発表しよう> (家庭での調べ学習の発表)</p> <p><次の状況の中で、それぞれの地域の人々は地域の在り方をどのようにとらえ行動したのだろうか></p> <ul style="list-style-type: none"> ●(A)伊勢神宮内宮前門に大型駐車場ができ、人が来なくなった商店街を再開させた。 ●(B)高度成長期に琵琶湖につながる堀の環境が劣化した状況の中で、保存再生を推進させた。 ●(C)歴史的風土保存地区の開発規制により宿泊施設が少ない中、民家ステイを始めた。 ●(D)集落の移転やモータリゼーションの動きの中で、歴史的古道の保全と周辺の林業を安定化させた。 	<p>・観光コースの選定、持参物、移動、観光行動、買い物、宿泊、旅行後の行動といった観点で、どのような人々が観光に関係しているかを考える。</p> <p>(A)「伊勢神宮前町」、(B)「近江八幡の水郷」、(C)明日香村を中心とした「大和・飛鳥民家ステイ」、(D)田辺市を中心とした「紀伊山地の霊場と参詣道」を分担して調べた結果をもとに、発表会を行う。))</p> <p><観光の当事者・関係者></p> <ul style="list-style-type: none"> ●(A)商店街企業、地元の再開発委員会、建築家、伊勢市 ●(B)地元自治会、青年会議所、北之庄沢を守る会、観光物産協会 ●(C)民家ステイのコーディネーター、ホストファミリー、博物館、明日香村周辺の市町 ●(D)林業従事者を抱える森林組合、地元の小学生、田辺市、三県協議会(和歌山・三重・奈良) 	<p>●コンテナとしての空間</p> <p>●空間構造研究の空間</p> <p>●認知地理学の空間(同時代の異なるまなざし)</p> <p>●作られた空間</p>
<p>【獲得される説明的知識】</p> <p>近畿地方では、観光資源が見出されたり、創り出されたりし、その後の社会の変化の中で、観光客のみならず、観光産業従事者、地域住民、自治体などの様々な人々の営みとの関わりで、観光の空間が形成されている。</p>			

第6時 持続可能な観光の観点からの観光空間の構想

段階	教師の指示・発問	生徒が得る情報・生徒の思考	授業構成の視点
未来予測・価値判断	<p>京都市では、観光に関わり、どのような課題に向き合っているのだろうか。</p> <p><オーバーツーリズムの状況が起きたとき、どのように対応すればよいか考えてみよう></p> <p><100年以上先の京都の観光を考えたとき、取り組むべき重要課題は何だろう></p> <p>天橋立は自然景観であり、建造物ほど将来の心配はないのだろうか。</p> <p>天橋立は、なぜ世界文化遺産の登録が目指されているのだろうか。</p> <p>「持続可能な開発」とは、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たす」ことであり、観光でも「持続可能な観光」という言葉で説明される。</p>	<p>・「京都観光総合調査」で、日本人観光客の残念度上位は「人が多い、混雑」「マナー」である。外国人観光客の増加が影響した結果でないだろうか。</p> <p>・慢性的な宿泊施設の不足によって、京都市にはどのような変化が見られるようになったのだろうか。</p> <p>・「歴史・伝統があり落ち着いたこと」と、それだからこそ人が集まることのバランスをどのようにとればよのだろうか。</p> <p>・歴史的建造物の防火対策、寺院の再建を見据えた木材確保のための植林などの他に、どのような課題に取り組めばよのだろうか。</p> <p>・砂を供給する湾口部に流れ込む川に、昭和初期から砂防ダムが建設され、海への流出土砂量が減った。</p> <p>・やせ細った砂州の砂が潮の流れで流出しないように、昭和26年(1951年)頃から砂州に直角に突堤が約50本築かれた。これにより「天のくし刺し」と皮肉られた。</p> <p>・天橋立の景観をどう評価すればよのだろうか。</p> <p>・天橋立は、古事記、百人一首(小式部内侍の歌)、雪舟作の絵などに出てくる。</p> <p>・天橋立の近くに、丹後国分寺跡、文殊の知恵で知られる智恩寺、伊勢神宮と関係が深い龍神社がある。</p> <p>・世界文化遺産の登録を目指す動きの中で、新たな観光資源の発見・創出が必要とされるのではないだろうか。</p>	<p>○マルチ・スケールのアプローチ</p> <p>●認知地理学の空間(同時代の異なるまなざし)</p> <p>●作られた空間</p> <p>●作られた空間</p> <p>●認知地理学の空間(異なる時代のまなざし)</p> <p>●作られた空間(空間の均質化と差異化)</p>
<p>【地域の在り方を考えさせる問い】</p> <p>観光に係る課題として、「歴史・伝統があり落ち着いたこと」というまなざしが向けられる京都市の観光空間や、世界自然遺産ではなく文化遺産の登録を目指す天橋立の今後観光の在り方は、どうあるべきか。</p>			

V. 成果と課題

本稿では、教育的意義を有している観光を考察の中核とする「日本の諸地域」の単元指導計画を開発した。ヴァルデンガによる4つの空間概念はそのために援用できるものであり、非日常性の追求と観光空間の形成についての観光学の知見も反映させられる。従来の教科書記述に十分には反映されてこなかった観光に係るまなざし論や「作ら

れた空間(空間の均質化や差異化)」を取り入れることができ、空間に対する見方・考え方は豊かなものとなる。また、観光にはマルチ・スケールのアプローチを用いて分析・考察できる内容があり、空間の階層性や重層性を具体的に把握できる。本稿は、次期中学校学習指導要領の改訂において、観光を考察の中核とする学習の導入も視野に入れられる。今後は、開発した授業モデルを実践し、

効果の検証を行うこと、また、小学校から高校までを見通す観光学習のカリキュラム構成も課題となる。

【注記・引用文献】

- (1) 須藤廣・遠藤英樹 (2018) 『観光社会学 2.0 - 拡がりゆくツーリズム研究』 福村出版, p.17
- (2) 国連世界観光機関 (UNWTO) 駐日事務所 「なぜ観光が重要なのか」 <https://unwto-ap.org/why/> 最終閲覧日 2020年10月31日
- (3) 佐藤克士 (2017) 『小学校社会科産業学習論研究』 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文, pp.125-127 (未公開)
- (4) 中俣均 (2013) 「文化地理学」人文地理学会編『人文地理学事典』, 丸善出版 pp.284-287
- (5) 文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 地理歴史編』 東洋館出版社, p.21
- (6) 三輪仁 (2007) 産業分析の地域経済学的アプローチ - 地域マスメディアをめぐる空間編成 -, 資本と地域 4, pp.7-16
- (7) 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 社会編』 東洋館出版社, p.70
- (8) 阪上弘彬 (2015) ドイツ地理教育におけるESDの観点 - レールプラン作成に関わる教育学と地理学の検討から -, 社会科教育研究 126, pp.38-48
- (9) 山本隆太 (2017) 空間コンセプト (Raumkonzepte) を軸としたドイツの新たな地誌学習の展開, 新地理 65 (3), pp.34-50
- (10) 岩田一彦 (2019) 「空間軸の形成 - 学会誌『社会系教科教育学研究』を中心として -, 社会系教科教育学会編『社会系教科教育学のブレイクスルー - 理論と実践の往還をめざして -』 風間書房, pp.3-11
- (11) 前掲 (9)
- (12) 益田理広 (2015) プラグマティズムに基づく地理学的空間概念の弁別, 地理学評論 88 (4), pp.363-385
- (13) 阪上弘彬 (2019) 「地域やその諸問題を客観的・主観的に分析する空間概念を用いた社会科地理的分野の授業デザイン」, 前掲 (10), pp.193-201
- (14) 阪上弘彬 (2018) 『ドイツ地理教育改革とESDの展開』 古今書院, pp.48-49
- (15) 前掲 (9)
- (16) 前掲 (9)
- (17) 前掲書 (13)
- (18) 前掲 (3), pp.122-189
- (19) 大橋昭一 (2014) 「観光とは何か」, 大橋昭一, 橋本和也, 遠藤英樹, 神田孝治編『観光学ガイドブック 新しい知的領野への旅立ち』 ナカニシヤ出版, p.5
- (20) ジョン・アーリ, ヨーナス・ラーセン / 加太宏邦訳 (2014) 『観光のまなざし [増補改訂版]』 法政大学出版局, pp.2-8
- (21) 遠藤英樹 (2019) 「ポストモダン以降の観光」 遠藤英樹, 橋本和也, 神田孝治編『現代観光学 ツーリズムから「いま」がみえる』 新曜社, pp.42-50
- (22) 日本交通公社 「観光資源台帳」 <https://www.jtb.or.jp/research/theme/resource/tourism-resource-list/> 最終閲覧日 2020年10月31日
- (23) 神田孝治 「地理学の視点」 前掲書 (19), pp.40-45
- (24) デヴィット・ハーヴェイ / 吉原直樹訳 (1999) 『ポストモダニティの条件』 青木書店, pp.364-396
- (25) 前掲書 (1), p.100
- (26) 山崎孝史 (2005) 「グローバルあるいはローカルなスケールと政治」 水内俊雄編『空間の政治地理』 朝倉書店, pp.24-44
- (27) 吉水裕也 (2011) 地理的スケールの概念を用いたマルチ・スケール地理授業の開発 - 中学校社会科地理的分野 「身近な地域の調査『高知市春野地区』」を題材に -, 新地理 59 (1), pp.1-15
- (28) 平成20年告示の学習指導要領に基づく中学校社会科地理的分野の文部科学省検定済の教科用図書は, 教育出版, 帝国書院, 東京出版, 日本文教出版の4社から発行されており, いずれも平成30年発行のものを分析した。
- (29) 佐藤克士 (2012) 持続可能な社会の形成者育成としての社会科観光学習 - イギリス地理テキストブック “Horizons 2 Geography 11-14” を手がかりにして -, 社会系教科教育学研究 24, pp.21-30
- (30) 岩田一彦 (1994) 『社会科授業研究の理論』 明治図書, pp.109-128